

# のりすぎ か じゅ 乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年

## その建学の精神の具現化と社会教育論の実践

### (1)

橋 本 久美子

#### はじめに

昭和3年4月から20年敗戦までの東京音楽学校は乗杉嘉壽校長(1878-1947)の時代であった。東京音楽学校61年半の歴史の中でも最長となる乗杉の校長在任17年半の間に、同校はめざましい発展を遂げながら、激動の時代の荒波を経験することとなった。

乗杉校長とその時代の音楽学校について、これまで戦時中の時局対応がクローズアップされるあまりに、音楽学校が演奏や作曲によって戦意昂揚の役割を担い、同校が明治以来築き上げてきた芸術教育の良き伝統すらも破壊されたというイメージで捉えられることが多かった。乗杉校長についてのイメージは、文部省行政官のキャリアを持つこと、それゆえに官僚的で文部省や軍部との交渉に手腕を発揮し、戦時中に男子を多く入学させて戦時体制に協力し、学校を進んで軍国主義路線に向かわせたというものではないだろうか。たしかに音楽学校がその時代を経たことの意味と結果は重く、慎重な考察を要するであろう。

しかしそれ以前の問題として、乗杉校長率いる東京音楽学校の時代に同校がどのように発展し今日への布石を為し得たか、またどのようにして戦時体制に巻き込まれ敗戦を迎えたかについて、今日まで研究・考察がなされていないことにまず注目しなければなるまい。

乗杉は昭和20年9月に卒業生を送り出すとまもなく辞職した。後任には田中耕太郎校長代理を経て、夏目漱石の門下生であった小宮豊隆が着任して新体制に移行する。乗杉は昭和22年2月に死去したため、戦時中の乗杉の事績と責任の一切合切が封印されて年月を重ねた。そのような経緯にも起因するのか、戦前戦中の同校に関する研究では、特定の音楽家や出来事について取り上げられることはあってもその前提となった校長の采配や方針などに言及されることはほとんどなかった。

本稿は、乗杉校長とその時代の音楽学校を辿り、乗杉の采配と教育思想の発露を浮き彫りにすることを目的とする。そこに見えてくるものは①明治の東京音楽学校建学の精神の具現化と、②乗杉が文部省行政官時代に提唱した「社会教育思想」に裏付けられた「学校の社会化と社会の学校化」の実践である。重要なことは、これらが矛盾することなく学校運営の両輪として協働するところである。

乗杉赴任以来、戦争が激化するまでの同校は、本科作曲部設置、邦楽科設置、外国人教師の増員、初代校長・伊澤修二の顕彰、オーケストラの演奏会場を奏樂堂から日比谷公会堂に移すなどの整備拡充を行う一方、対外的な活動においても、御前演奏、演奏旅行、上野児童音楽学園の開園など飛躍的な発展を遂げた。活動は紀元二千六百年奉祝行事への参加や満州建国十周年奉祝の満州演奏旅行へと続く。しかしそのような発展は文部省行政官としての腕前を遺憾なく発揮した結果であっただけに、戦況の激化とともに時局対応のなか、彼が理想に掲げていた「教育の自主独立」は危うくなり、音楽学校そのものが荒波のただなかに押し流されていくこととなる。

しかしながら、東京音楽学校はただ時代に翻弄されていたのではない。戦時体制を免れることはなかったが、昭和16年以降の4年間に於いてさえ、ついに教員・生徒が次々に動員されて演奏会や授業が成り立たなくなるまで「報国団」の名を冠して定期演奏会を行い、演奏旅行や慰問演奏によって音楽を届ける日々を継続した。また昭和18年に邦楽科を本科邦楽部に統合して位置づけを明らかにし、昭和19年に師範科修業年限を3年から4年に延長するなど、一時の悪夢が過ぎ去り次第、すぐにもより高い理想に向かって邁進する夢を描いていたことが窺われる。本稿を通じて、乗杉社会教育論に基づく学校運営のもたらした両面が明らかとなろう。すなわち①官立音楽学校がその個性と使命によって輝き、校長が学校と日本の将来を見据えて決断し、社会に貢献し今日につながる布石をも為した面、②時局対応に翻弄された面である。

『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二卷』<sup>1</sup>と『同 演奏会篇第二卷』<sup>2</sup>に当時のカリキュラム、行事、事業などに関する資料が掲載されているので、次にはこれらを校長の教育理念に照らして検証することが必要であろう。

音楽関係者の間では乗杉が、①文部省普通学務局第四課長として社会教育行政に携わり、後年の音楽学校長時代に実践に移されることになる教育思想の原点がその時期にあること、②特に教育学や教育史の分野において彼の思想が現代日本の社会教育論および社会教育行政の原型と考えられ、乗杉が日本の社会教育の成立史上、最重要人物の一人と目されていること、③しかもその思想形成には、第一次世界大戦中の国家総動員体制下の欧米の教育事情を視察した体験が大きく関わっていることなどは、ほとんど知られていないと言えよう。

乗杉は大正10年に自ら発刊・主宰した雑誌『社会と教化』（後に『社会教育』と改題）その他多くの雑誌に膨大な論文や講演録をのこしている。その内容は彼が職務上関わり視察したあらゆることに言及し、多岐にわたる。

近年、彼の文部省時代と社会教育論に関する研究が進展し、本稿も先行研究に多くを負っている。なかでも小川利夫『原型としての乗杉社会教育行政論』（1992）<sup>3</sup>、名古屋大学共同研究による『戦間期日本社会教育史の研究（その2）—乗杉嘉壽の社会教育論を中心に』（1997）<sup>4</sup>、松田武雄の『＜教育改造＞と社会教育の思想—乗杉嘉壽の社会教育論』（2001）<sup>5</sup>などは、乗杉

の膨大な著作がその背景にある文部省組織と政治的な勢力関係などをふまえながら読み解かれ、音楽関係の文献からは知り得ない教示を数々頂いた。さらに松田の大著『近代日本社会教育の成立』(2004)<sup>6</sup>では近代日本社会教育の流れとそれぞれの時期における変化、また乗杉の社会教育論の特徴から社会教育全体のなかでの位置づけまで取り上げられていて乗杉研究上欠かせない一冊である。

上述の諸研究は、当然のことながら乗杉の文部省時代に集中している。それは従来、乗杉嘉壽の教育論や思想に対して関心が持たれたのは社会教育行政の研究領域においてのみであり、音楽関係者の間では乗杉社会教育論の重要性は言うに及ばず、乗杉の教育思想から音楽学校の17年半を捉えるという発想すら生まれてこなかったからである。乗杉の文部省時代の社会教育論が再評価される今日、その教育論が、彼の最後の仕事となった荒波の中の東京音楽学校の舵取りの場でいかに実践されたのか問い直すことは無意味ではなかろう。乗杉の社会教育論は東京音楽学校時代をもって全体像を現し、東京音楽学校時代は彼の社会教育論との関係を検証することによって真の姿を現すからである。

本稿は以下のように構成される。第1節では乗杉の文部省時代までを概観する。第2節では教員数と生徒数の推移から乗杉時代を通観し、東京音楽学校時代を3期に分けて考察する。

## 第1節 文部省行政官時代

- 1-1 大正6年の欧米視察まで
- 1-2 欧米視察と社会教育論の形成
- 1-3 乗杉嘉壽の社会教育論の要点

## 第2節 東京音楽学校校長時代

- 2-1 昭和2年度から21年度までの教員数と生徒数の推移
- 2-2 第1期：赴任から昭和6年の欧州視察前まで（昭和3年4月～6年8月）
  - 2-2-1 赴任当時の東京音楽学校
  - 2-2-2 行事、出来事の急増と同声会組織との連携強化
  - 2-2-3 第1期の出来事
- 2-3 第2期：欧州視察から大東亜戦争前まで（昭和6年9月～16年12月）
- 2-4 第3期：大東亜戦争勃発から敗戦、退職まで（昭和16年12月～20年10月）

なお本稿における歴史的事項についての呼称は、当時の資料中の表記に準拠することを原則としている。また原資料中の旧字体は、便宜上、人名を除き新字体に改めた。

## 第1節 文部省行政官時代

### 1-1 大正6年の欧米視察まで

本稿の主眼は乗杉の文部省時代の論究あるいは社会教育論の形成や意義を詳説することではない。ここでは先行研究に負いつつ、乗杉校長の采配の基盤となった考え方を把握することとしたい。

乗杉の経歴については、『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』中の歴代校長の項目に紹介されており、これに乗杉自身の著作の他、小川利夫氏、松田武雄氏らの先行研究を併せると彼の文部省行政官としての活躍と、社会教育思想の形成に至る過程の概要を知ることができる。

乗杉嘉壽は明治11年（1878）11月19日、富山県東礪波郡出町の眞壽寺住職、乗杉壽貞の次男として東京府に生まれた。東京音楽学校の前身となる音楽取調掛はその翌年設置されている。明治31年（1898）石川県立金沢第一中学校を卒業。同年、創立11年目を迎えた東京音楽学校でオーケストラの定期演奏が始まった。34年（1901）第四高等学校を卒業、37年（1904）7月に東京帝国大学文科大学哲学科卒業。大学院に進み実践哲学を専攻し、履歴によれば同年10月、「任文部属」となり、普通学務局勤務を命じられ第三課長となる。最初の任務は、通俗教育と青年団に関するものであったことから、彼は行政官としての出発点から社会教育の分野で経験を積むこととなる。その後40年（1907）8月には普通学務局第二課長となり、中学校がおもな任務となった。英語教授法調査委員補助を命じられたのもこの年である。

明治40年から大正6年まで、東京音楽学校では湯原元一が校長であったが、この頃、邦楽調査掛、唱歌編纂掛、楽語調査掛が相次いで設置され、昭和へ続く事業を開始している。湯原は乗杉にとって大学も文部省も先輩であり、文部省から最初に奉職した学校も熊本の第五高等学校と一緒にあった。その熊本へ41年（1908）2月、第五高等学校教授として赴任。43年（1910）10月に関東都督秘書官を命ぜられ、南満州鉄道沿線各地へ出張。大正2年（1913）12月再び文部省督学官となり、普通学務局で青年団の事業に関わる。

文部省は大正4年（1915）、第一次世界大戦下の欧米の教育事情を調査するために「時局ニ関スル教育資料調査会」を設置し、彼は2月に調査委員となった。このような任務を通じて、学校教育は国家の危機管理体制の一環であり、教育の任務は社会に必要な人材を育てることであるという考え方が形成されていったとみられる。

乗杉の欧米視察前の考え方のうち、東京音楽学校校長時代との関連に焦点を置く本稿においては次の3点が特に注目されよう。

第一に、欧米の中で特にドイツは我が国が諸般の制度文物において恩恵を蒙っていたが、第一次大戦におけるドイツとの開戦に鑑み、学問的にドイツから独立する覚悟が必要であると主張している点である<sup>7</sup>。

第二に、第一次世界大戦によって西洋文明は「全く皮相的である」ことをさらけ出し、日本にこそ「世界的興国」の使命があると主張している点である。すなわち、日本は世界的国家の建設を自覚し努力することが必要であり、「信頼するに足らぬ西洋の文化、西洋の文明に

対して、世界無比の尊厳なる我が国体と、之に伴う祖先伝来の良習美俗を兼有して居る我が国文明が、世界の平和、世界の文化の上に一大光明を与うべき使命を有して居る」<sup>8</sup>のである。

第三に、欧米視察前の乗杉において「社会教育」はキーワードではあったが、未だ彼の独自の視点は鮮明ではなく、論点や主張も後年とは異なる点である。視察前は児童の天性を発揮させるため勝手気儘に行動させる風潮があるのを戒め、「必ずや一定の規律を守らしめ一定の作業を強制し、その成績の如何に対し適当なる褒貶督励を与ふことは当然のことである」<sup>9</sup>という立場を強調していたが、第一次大戦下米国の教育事情視察後には児童の自学自習を推奨するようになる。

## 1-2 欧米視察と社会教育論の形成

前述の「教育資料調査」の実績を携え、乗杉は大正6年（1917）年3月28日、欧米の戦時体制における教育事情調査のため「教育及教授法研究ノ為満一ヶ年半間米国及英国へ留学」を命ぜられた。調査はアメリカに始まり、イギリス、フランス、イタリア、スイスと進み、再びイギリスとアメリカを経由して翌大正7年12月15日に帰国した。

視察を通じて、彼が特に注目したのはアメリカとイギリス、特にアメリカの国家総動員体制下の教育であった。戦争遂行にあたっての国民総動員のあり方、教育の再編成などを目の当たりにするなかで、国家体制につながる学校教育、社会教育に適合する学校教育という考え方を整えていく。

視察前の乗杉はアメリカの教育事業などほとんど注目していなかったが、参戦後イギリスからも学者・有識者がアメリカに派遣され学んでいるのを知り、米国の教育事情の調査に熱を入れた。視察の最後に再びアメリカを訪れたのもそのためである。乗杉の米国礼賛は「米国民は其の歴史の開始と同時に、最も良く読み且つ教えられた国民であった」「之を以て見れば米国の今日ある所以、又敢て怪しむに足らないのである」という記述からも推察される。アメリカの「实际的利用的に発達」した教育の例として、ニューヨークの二十余の中学校学課目は「各校何れも配合を異にし、生徒は自ら好む所の学課目に従ひて教育せられ、且つ各方面に進みつゝあり」と紹介し、教材中心の教育から児童中心の教育への転換を唱える。「到底我邦の如き画一主義の国には企及し得ざる学課目の自由と豊富とを見るべし」<sup>10</sup>と日本における教育の見直しの必要性を強調する。渡米前の見解とは明らかに隔たりが認められよう。

アメリカから学ぶべき学校教育は、能率良い教授のあり方、学校相互の連絡を良くすること、そして特に、学校が社会の中心として絶えず行動する点である。これが「学校の社会化」である。これに伴い、日本固有の文化を高く評価していた論調は影をひそめ、かわって「教育改造」を唱え、教育の現状への積極的な提言を行っていく。

音楽学校に赴任してからの乗杉は、それまで外部との交流の乏しかった同校を社会の中心として機能させる方策を次々に講じていく。アメリカ視察が大いにヒントになったことであ



ろう。

視察後、欧米の教育現場における女教員の多さ、家庭教育における婦人の役割についてしばしば取り上げ、女子教育の向上を説くのも特徴である。「家庭教育に任ずる婦人は最も偉大な教育者であつて、国民教養の上に最も大なる役目を負うて居る」<sup>11</sup>として、「女子教育は実に国運開拓の第一歩である」<sup>12</sup>。東京音楽学校赴任の4年前の言葉である。東京音楽学校では年ごとに多少の変動はあれ、女生徒が男生徒の約二倍を占め、教師もいわゆる基礎教養科目を除けば、非常勤を含む全体では女性が多数であった。上述の欧米視察の成果を実践し世に問うならば、東京音楽学校以上に社会教育的要素が豊富で、しかも未開拓な部分の多い前人未踏の教育現場は無かったと言っても過言ではなからう。

乗杉が欧米視察後、すなわち自学自習を尊重し、女子教育の重要性に注目し、洋の東西の美点を積極的に取り入れることを基本方針としてから東京音楽学校に赴任したのは、図らずも時宜に適い、幸いなことであった。

### 1-3 乗杉嘉壽の社会教育論の要点

我が国の社会教育思想は幕末から明治初期にかけて欧米から導入され、言葉としての最初の使用例は明治10年（1877）に福沢諭吉が三田講演会において「人間社会教育」として用いたのが最初とされる<sup>13</sup>。社会教育という言葉を用いて社会と教育との関係を論じた例は、明治25年（1892）に山名次郎が著した『社会教育論』、佐藤善治郎著『最近社会教育法』（明治32年）、井上亀五郎著『農民の社会教育』（明治35年）、江幡亀寿著『社会教育の実際的研究』（大正10年）、植木政次郎著『社会教育の理論と実際』（大正13年）など継続的に現れ、乗杉が文部省を去った大正14年には社会教育協会の雑誌、その名も『社会教育』が発行された。文部行政官・乗杉の社会教育思想形成の立脚点もおおよそこの流れにあったと考えられる。

大正8年（1919）に文部省普通学務局第四課（社会教育課）が設置された頃、乗杉は次のような言葉を残している。「教育の国家化」<sup>14</sup>「デモクラシーは秩序ある自由と訳する方が簡単でよく解ると思ひます…（略）…デモクラシーとは各個人が自己の責任を理解しこれを果すだけの實力識見を養つて秩序ある自由の公民として社会に立つといふ思想であります」<sup>15</sup>。

個人・家庭・地域・社会・国家への意識が強く打ち出された乗杉の社会教育の思想が、大正デモクラシーと同じ土壌と空気に養われたものなのである。

大正9年（1920）頃から乗杉は以前にも増して社会教育という言葉をもっと積極的に意味合いにおいて用いるようになる。同年に発表された論述には「社会教育の目標」「社会教育に就て」「社会教育の意義並施設」などのタイトルが並ぶ。

乗杉が大正12年に出版した著書『社会教育の研究』の第一章（第一章部分の初版は大正2年）では、社会は「社会とは共同目的を有する人格者をその要素とする有機的の団体である」<sup>16</sup>。社会教育は「社会教育とは個人をして社会の成員たるに適応する資質能力を得せしむ

る教化作業である」<sup>17</sup>と定義される。

乗杉が文部省の「通俗教育局」に「社会教育」を確立させる努力が実った矢先、彼の活動を好意的に支えていた文部大臣が交代し、それに伴う省内人事等により彼は更迭され、松江高等学校長（現国立大学法人島根大学）となる。大正13年6月のことである。松江時代の4年間に關する資料は、戦後の学制改革とその後数回にわたる改編等により入手困難な状況にあり、当時の「学校一覧」の職員名簿に名前を確認し、同窓会誌の巻頭言を見ることができるとどまっている。

乗杉社会教育論の出発点は「教育の実際化」にあった。教育が社会や国家の従属物となることを良しとしない「教育の自主独立」も特徴である。そこでは国家より社会が優先される。すなわち「教育の実際化」は「学校の社会化」と「教育の社会化」につながる。一言に集約するならば「学校の社会化と社会の学校化」である。これが乗杉社会教育論の要点である。

大正デモクラシーの中で形成した思想は、乗杉の更迭後も文部省内に引き継がれるが、社会教育を提唱し推進した乗杉という論客を失った後は、担当者の交代に加えて国内情勢に押される格好でその潑瀾たる理想論は、明らかに変化・退潮の兆しを見せ始める。国全体が「時局」の一言で統制されていく頃、文部省の社会教育局はいよいよ教育の社会化、国家化の号令をかけるようになり、発表される論文等も行政官の個性や人間味を失い、体制の代言のように硬直したものとなっていく。音楽学校長となって以降の乗杉は、何かと役人のイメージで捉えられるが、実際のところは役人としてはむしろ型破りで、進取の気性に富み、任務となった課題については妥協無く学び、自分の視点をストレートに発信し迅速に仕掛けていく、強烈な個性の持ち主だったのである。

やがて日本が国家総動員体制の時代を迎えた時、発案し発信する実践家である乗杉は、小さな学舎に居たがゆえに、敗戦まで社会教育の理想に燃え、個性と輝きを失わず、今日への布石を為すことができたのではなかろうか。

## 第2節 東京音楽学校校長時代

「音楽学校長後任決定す 廿四日の院内閣議で東京音楽学校の校長は左の如く決定した 松江高等学校長 乗杉嘉壽 任東京音楽学校長（二等）」昭和3年4月25日付「東京朝日新聞」は夕刊第一面で報じている。乗杉が実際に東京音楽学校に初出校したのは5月1日であった。

### 2-1 昭和2年度から21年度の教員および生徒数の推移

表「東京音楽学校教員数および生徒数 昭和2年～21年」は、乗杉時代の前年から翌年までの教員数・生徒数について数種類の資料によってまとめたものである。

# 東京音楽学校教員数および生徒数の推移 昭和2年～21年

昭和	西暦	統計の内容と典拠 *1	学科構成年限・定員など	校長	教授	配属 将校	助教授	外国人 教師	講師	外国人 講師	教務 嘱託	研究科							
												声楽部	器楽部	作曲部	邦楽部	男	女	男	女
2	1927	教員数・生徒数 『一覽』	予科1年・本科(声楽部・器楽部 Pf, Org, Vn, Vc) 3～5年 研究 科(声楽部器楽部2年・作曲部 3年) *2	1	14	1	11	3	12		24	1	4	2	7	1	0		
3	1928	教員数・生徒数 『年報』		1	11	1	12	3	13		17	0	4	2	7	1	0		
4	1929	教員数・生徒数 『一覽』	助教授中2名在外研究 教務嘱 託中15名管絃楽部員	1	16	1	15	3	23		32	1	1	4	3	1	1		
5	1930	教員数・生徒数 『一覽』	本科器楽部にCb, Fl他管楽器加 わる	1	18	1	14	4	28		43	3	6	6	4	0	1		
6	1931	教員数・生徒数 『一覽』	本科に作曲部を置く	1	18	1	14	4	29		53	2	10	7	9	0	0		
7	1932	教員数・生徒数 『一覽』	本科作曲部志望の予科生初入学 選科に作曲を加える	1	18	1	16	5	30	1	53	0	8	4	9	1	0		
8	1933	教員数・生徒数 『一覽』		1	19	1	14	5	38			0	5	5	6	1	1		
9	1934	教員数・生徒数 『一覽』		1	19	1	15	5	33		70	1	4	6	11	2	1		
10	1935	教員数・生徒数 『一覽』		1	18	1	15	5	35	1	74	1	3	4	12	2	1		
11	1936	教員数・生徒数 『一覽』	邦楽科設置 外国人教師を7名 に増員(うち備教師1名)	1	20	1	14	6	32	1	81	1	2	6	17	2	1		
12	1937	教員数・生徒数 『一覽』	職員定員改正 教授22名助教授 15名となる	1	23	1	16	6	28	3	84	2	5	6	19	2	2		
13	1938	教員数・生徒数 『一覽』	教授24名、助教授16名に増員	1	25	1	20	5	31	3	79	3	9	5	19	1	1		
14	1939	教員数・生徒数 『一覽』		1	25	1	20	5	31	4	84	3	12	7	21	3	0	4	10
		14年度入学定員 『百年史』*3																	
15	1940	教員数・生徒数 『一覽』		1	25	1	20	5	34	5	93	5	10	8	20	2	0	6	21
17	1942	教員数・生徒数 『一覽』*4	教務嘱託のうち3名応召または 入営、補助11名含む	1	25	1	21	5	39	5	94	9	11	11	30	3	0	4	21
18	1943	5月1日現在生 徒数『公文書綴』 18年度生徒定員 『百年史』*5	邦楽科が本科に統合される(当 初の規程では「本科邦楽科」と 表記された)									11	12	18	30	3	2	4	19
19	1944	4月10日生徒調 『公文書綴』 4月15日現在生 徒数 *6 同上男生徒現在 数 同上男生徒応召 数	表中の邦楽科人数は2,3年生。 1年生は本科の人数に含まれ る。但し、19年度本科の専攻別 人数は不明。4月本科は修業年 限3年から4年となり予科廃 止、「甲種師範科」は4年制の「師 範科」となる。																
												12	12	27	14	1	2	1	16
												3	12	5	14	1	2	1	16
												9	22		0				
20	1945	12月現在生徒数 『公文書綴』																	
21	1946	5月20日現在生 徒数『公文書綴』	研究科は第1学年のみ																

◎表中の空欄は資料自体に記載が無い事を示す。

\*1 表中に『一覽』『年報』『公文書綴』『百年史』と略記した典拠資料は、それぞれ『東京音楽学校一覽』『学事年報』『自昭和十八年至二十年公文書綴 教務課』『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』である。

\*2 年度によっては入学定員が明らかではないが、大正9年度では、予科約35人(内訳：声楽志望者約10人、ピアノ志望者約15人、ヴァイオリン志望者約10人)、甲種師範科約40人(内訳：男子約15人、女子約25人)、乙種師範科男女計約20人(乙種師範科は昭和2年2月に募集中止となりそのまま廃止された)

\*3 昭和14年度の入学案内による。予科40名の内訳は声楽志望者約8名、ピアノ志望者約15名、ヴァイオリン志望者約7名、オルガン、セロ、ダブルベース志望者約8名、作曲志望者約2名。邦楽科18名の内訳は能楽(観世流、宝生流)を専修する者約6名、箏曲(生田流、山田流)を専修する者約6名、長唄を専修する者(唄を主とする者及三味線を主とする者)約6名であった。(『百年史』523頁参照)



のりすぎ かじゅ  
乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校

			本科										邦楽科				甲種師範科			予科			男 計	女 計	男女 合計	
研究科計	男女計		声乐部		器楽部		作曲部		本科計		男女計	男	女	男女計	男	女	男女計	男	女	男女計						
男	女		男	女	計	男	女	計	男	女	計										男	女				計
4	11	15	6	19	25	23	28	51				29	47	76				25	65	90	10	20	30	68	143	211
3	11	14	6	15	20	26	34	60				32	49	81				27	72	99	10	20	30	72	152	224
6	5	11	4	19	23	24	34	58				28	53	81				25	67	92	8	23	31	67	148	215
9	11	20	3	19	22	29	33	62				32	52	84				24	68	92	13	21	34	78	152	230
9	19	28	5	20	25	27	32	59				32	52	84				22	72	94	9	25	34	72	168	240
5	17	22	5	19	24	26	40	66	0	0	0	31	59	90				23	69	92	10	20	30	69	165	234
6	12	18	6	17	23	21	44	65	1	1	2	28	62	90				34	65	99	12	25	37	80	164	244
9	16	25	6	17	23	22	50	72	3	2	5	31	69	100				30	65	95	13	25	38	83	175	258
7	16	23	7	16	23	21	55	76	6	2	8	34	73	107				46	66	112	12	33	45	99	188	287
9	20	29	7	22	29	20	60	80	7	1	8	34	83	117	5	12	17	45	74	119	14	28	42	107	217	324
10	26	36	7	24	31	24	61	85	8	1	9	39	86	125	8	28	36	41	81	122	11	34	45	109	255	364
9	29	38	9	24	33	21	66	87	7	1	8	37	91	128	9	44	53	53	82	135	17	35	52	125	281	406
17	43	60	10	20	30	24	70	94	5	2	7	39	92	131	10	43	53	58	84	142	17	38	55	141	300	441
																	18			40			40			
21	51	72	11	21	32	28	81	109	5	2	7	44	104	148	10	41	51	71	83	154	23	29	52	169	308	477
27	62	89	15	25	40	36	78	114	6	2	8	57	105	162	7	57	64	84	106	190	25	35	60	200	365	565
36	63	99	14	24	38	41	77	118	8	1	9	63	102	165	13	71	84	83	111	194	22	50	72	217	397	614
												30					15		30				30			
41	61	102										98	164	262	11	48	59	66	119	185			0	216	392	608
41	44	85	21	51	72	52	73	125	14	2	16	87	126	213	11	47	58	65	120	185				204	337	541
10	44	54	13	51	64	41	73	114	12	2	14	66	126	192	9	47	56	36	120	156				121	337	458
31		31	8			11			2			21		21	2		29							83		83
46	73	119										98	130	228	3	1	4	39	126	165			0	186	330	516
44	77	121										115	162	277				42	151	193			0	201	390	591

\* 4 『東京音楽学校一覽 自昭和十六年至昭和十七年』は昭和18年3月発行、職員生徒については昭和17年6月現在である。

\* 5 昭和18年度5月31日起案「生徒数等ニ関スル件報告」によれば、予科定員30、本科各学年30、甲種師範科30、邦楽科15となっている。（『百年史』164頁参照）

\* 6 『公文書綴』によれば「現在の動員先期間人員：海軍技術研究所：女子7常住。住友通信工業玉川向製作所女子110。3ヶ月。沖電気高浜工場男子9、女子6。3ヶ月。日立製作所深川工場女子10。1ヶ月」（『百年史』180頁参照）

生徒合計数を見ると、昭和2年から昭和18年頃まで着実に増加していくことがわかる。赴任後数年は漸増であるが、昭和8年頃から増加が目立ち始め、邦楽科設置後から急増ともいえるべき伸びを示している。乗杉校長着任から10年を経た昭和13年は昭和2年と比べるとほぼ倍増する。

昭和13年の入学生の一人、作曲家・森脇憲三は「例年、男七、八人、女二十二、三人合格だったそうだが、昭和十三年春のわれわれのクラスは、男女半々の五十人が合格した…(略)…男が少ないと混声合唱のバランスがとれないこともあろう。地方に散ってゆく男性こそ地方への貢献度が高いことに文部省が気がついたのかもしれない。さらに、軍部の動きを見て、戦場に行く運命の男性を確保しておかねばと思ったのかもしれない」と回想する<sup>18</sup>。

増加の勢い止まらず、昭和15年から16年へ合計数で88名増えている。繰り上げ卒業が始まった昭和16年以降も音楽学校の入学者が増えていくのは時代のイメージからするとむしろ意外ではなかろうか。表には記されていないが、入学者のみならず志願者も順調な伸びを示しているのである。昭和18年度の生徒数に至っては昭和2年時点の3倍に迫る。さらに目を引くのは、定員と実際の入学者数の差であろう。毎年の入学定員を記すだけの資料が揃わないが、昭和14年と18年だけを見ても、その差は歴然としている。14年の予科は定員40名に対して55名、18年には予科の定員は30名と減っているのに対し、実際の入学人数は72名と、定員とは名ばかりで逆に増加している。同様に師範科と邦楽科も14年度より18年度のほうが入学定員は減少しているにもかかわらず、入学生は増加している。

異様にも見えるこのあたりの事情については、特段文部省とのやりとりがあった形跡もない。昨今の入試事情からすれば当時の定員枠と入学者数の開きは甚だ不可解であるが、定員枠の大幅超過が継続的に行われ、少なくとも乗杉時代にはほぼ慣例化していた。これで容認されていた背景には、あるいは後述する分教場選科との関連などによる経済的折り合いなどもあったのだろうか。

昭和17年入学生の話である。チューバ志望で入学した大石清・本学元教授の回想によれば、入学式の校長挨拶で「今年は防空要員として男を多く入学させた」と言われ、かえって防空要員ではなく音楽家として認められるようになりたいと奮起したそうである<sup>19</sup>。たしかに男子をなるべく多く入学させることで音楽と音楽学校に対する社会の認識が変わることに学校側が期待を寄せていたということもあり得よう。しかし音楽学校の生徒を増やした原動力は、時代の要請に応えるべく音楽文化を増強するという方針を押し通した校長の情熱と采配であったろう。

もう一人17年入学の岩井直博も、トランペットで受験したところ、前の受験生二人が非常に巧く、彼の演奏には早々とストップがかかった。ところがその後ほとんど吹いたこともないフレンチホルンを渡されて吹かされ、翌日の学科試験直前に校長室に呼ばれ、乗杉校長より「ホルンなら入れるけど、どうかね?」とのお話。「入学してからわかったことだが、当時

の徴兵や召集などで現役、OBを含めても学校オーケストラのホルン奏者が少なく、かなりの曲が演奏不能だったこと、また戦況が日ごとに悪く空襲が予想され防火要員としての男子生徒の手が必要だったことが入学の決め手だったようだ」と語る<sup>20</sup>。岩井は18年10月学徒出陣し、釜山（現 韓国）、羅南（現 北朝鮮）、千葉県等で約2年に及ぶ軍隊生活を経て復員、20年10月頃には本科2年に編入された。後にトランペット奏者、クラシックからポップス、また教育教材に至るまで5000曲に及ぶ作・編曲そして指揮で我が国吹奏楽界の重鎮として名を馳せる岩井は、戦後こうして学校ではホルン、クラブや米軍キャンプではトランペットと二つの楽器でスタートした。

定員と大幅に異なる入学者数は、教職も含め音楽に携わる人間を多く輩出しようとする意図も窺われるが、それにしても常識外れとも言えるほどの奇策が年々継続した背景には、乗杉の並はずれた手腕を考えざるを得ない。時局に鑑み音楽家は国に奉公できる人材であると確信する校長の英断であろうか。とはいえ、受験の時点で少々遅れをとっていたにもかかわらず入学を許された生徒たちが、その後の音楽界をリードする人材に育っていったことを見れば、定員など意にも介さず音楽への熱意や人間性をみて積極的に受け容れた判断は、先見の明があったと言わざるを得ないであろう。

昭和19年に合計数は初めて減少。また同年は4月15日付で男子生徒の応召の状況がわかる。研究科生徒41名のうち31名、本科および邦楽科では98人中23名、師範科では65人中29名が応召され、学校全体では男子121名中83名が応召されている。統計上は、女子の人数に変化はないが、表の注「\*6」にあるように、工場や研究所への動員が行われていたため、実際に通学できた生徒の人数が記されているわけではない。

次に教員数であるが、乗杉校長の折々の訓話や報告などにもあるように、教授、助教授、外国人教師および講師の人数が僅かずつではあるが増員されている。管楽器の外国人教師を招聘すること、イタリア人の男性の声楽家を招聘することなど同校の規模で容易ではなかったであろうが、常々その必要を訴えていた校長は、徐々に増員を図ったものと思われる。興味深いのは、教授・助教授の定員増が決定される前年に事実上増員されている場合があることである。小規模な官立学校でありながら、専門実技の個人教授を行い、外国人教師の倍増を希望するという特殊事情をかかえる同校において、教員の確保という問題はいわば恒常化していたことであろう。教員数については『東京音楽学校一覧』が「自昭和十六年至昭和十七年」以後発行されなくなったため、そこに昭和17年度の状況が記されたのを最後に、同じ基準で人数を継続調査する資料が揃わないのが実情である。

今回は教員、生徒とも乗杉校長在任中に焦点をしばったが、最終的には明治20年の創立から昭和戦後まで可能な限りの資料を動員して、入学志願者、受験者、入学者などの人数も含め、東京音楽学校全体が見通せることが望ましい。

また今回の調査対象ではないが、東京音楽学校で学んだ留学生たちが帰国後アジア各地に

において重要な役割を果たしたケースも多く、最近ではしばしばアジア各国において研究対象とされているため、留学生について時期、国、人数などを明らかにしていくことも求められている。

## 2-2 第1期 赴任から昭和6年の欧州視察前まで（昭和3年4月～6年8月）

### 2-2-1 赴任当時の東京音楽学校

松江から乗杉を迎えた当時の音楽学校はどのような状況であったのだろうか。昭和2年度の『学事年報』には、まず校舎の老朽化が報告されている。

「本校ノ校舎ハ明治二十三年ノ木造建築ニシテ規模甚ダ狭小ナリ其後ニ至リ教室及練習室ノ増築アリシモ猶狭隘ニシテ授業上ノ不便尠カラサルノミナラス學術技芸ノ進歩ヲ妨クルコト僅少ニアラサルナリ」

明治23年（1890）に建築された校舎正面のほぼ中央にある玄関から2階に上がると奏樂堂があり、これを中心にして左右に教室や練習室などが並んでいた。次は奏樂堂の窮状を訴えるくだりである。

「奏樂堂ノ構造ハ現代的ニアラスシテ設計宜シカラス設備モ亦不完全ニシテ…（略）…演壇ハ甚タ狭クシテ多人数ノ合唱及管絃樂合奏ヲ行ヒ難ク又聴衆ノ座席ハ少数ニシテ参聴希望者ニ満足ヲ与ヘ難ク」という次第で、校舎全体にわたって「破損腐朽ノ箇所ヲ生シ危険ノ虞（おそれ）アルニヨリ速ニ改築ニ着手ヲ要ス」というのである<sup>21</sup>。

東京音楽学校の同窓会誌『同声会会報』（第161号以降は『同声会報』となる）が乗杉赴任を最初に伝えたのは、昭和3（1928）年5月。「母校の村上校長が台北大学へ御栄転になり、乗杉校長が新任される事になりました」<sup>22</sup>。

乗杉赴任後の昭和3年5月から6月にかけて、同声会では臨時会議が開かれ、新校長を従来通り同声会長に迎えるかどうか話し合われていた<sup>23</sup>。意見はa) 音楽学校長を同窓の中から挙げたい。b) 母校の校長が会長となることが会の発達には都合がよい。c) 前年に母校で起こった好ましからぬ事件に対して同声会が事件に何ら手を下し得なかったのは校長が会長だったからで、改正を必要とする。d) 学士会や茗溪会のような会長を置かない組織に倣ってはどうか等に分かれた。話し合いは決着せず、会員から14名の委員が選挙によって選ばれ委員付託となった。乗杉が新会長に決まり、初めて挨拶したのは7月25日であった。

上述のc) については昭和2年に入学した大井悌四郎の証言が一つの拠り所となろう<sup>24</sup>。大井は入学して間もなく忘れられない出来事が二つあったと語る。聞き取りに同行した筆者には、終始真面目一本気そのもののような同氏から、ほとんど何の前置きも雑談もなく事件のことが語り出された様子がいまだに鮮明に蘇ってくる。出来事の第一は同級生から退学者が出たこと。これは成績上の理由によるものと、男女交際が発覚して退学になった計2件であった。確かに同年度の『年報』において「生徒ノ操行ハ概シテ良好ナルモ二、三人ニ対シテハ

稍不良ノ疑アルヲ遺憾トス」と報告されている。大正年間を見ても、年報の報告は判で押したように「生徒ノ操行ハ尋常ナリ」あるいは「生徒ハ操行佳良ニシテ・・・」と記されていたところからも大きな出来事であったのだろう。

しかし同声会で報告されている「事件」は、第二の出来事であろう。すなわち校長排斥問題である。乗杉の前任、村上直二郎は帝国大学史学科卒。日本史、日欧通交史などを専門とし、台湾史編纂に携わった後、高等師範学校、東京外国語学校等を歴任、大正7年から東京音楽学校校長であった。著書『長崎市史 通交貿易編西洋諸国部』、訳書『長崎オランダ商館の日記』などをのこし昭和15年には上智大学教授、のち総長となった。大井の話に戻るが、入学した昭和2年7月頃、上級生から秋に一騒動あると伝えられた。予科生の大井にとって校長は「入学式で一回会っただけ」で「十一時頃になると門をくぐって見えて校長室にお入りになる。二時頃にはお帰りになる。これだけでは排斥する理由がわからない」。しかし上級生はそのことが問題だと主張、たとえば大正13年にベートーヴェンの《第九》が初演されたおり門の外まで行列が出来、3回演奏され、非難や再演希望が殺到したにもかかわらずそれを無視したことなどへの不満が高じて、学校にも音楽にも情熱を傾けてくれる人を校長にと望む声が強まっていた。9月に入ると本科と予科の男子生徒全員が銀座にある山田耕筰の事務所に挨拶に出向き、その後も何度か集会を持った。大井の話では10月末頃に校長が交代したというが、記録上は昭和3年4月17日に台北帝国大学教授に任ぜられるまでは村上が東京音楽学校校長であり、乗杉の赴任決定も前述の通り3年4月24日である。

乗杉は昭和3年7月25日の同声会総集会において新会長として初めて挨拶した。会報は新会長の挨拶に対して「一同は先生の御熱誠に感激した」<sup>25</sup>と要旨を掲載している。学校の現状に言及されているところを一部引用する。「諸君の母校である我が学校は頗る遺憾の点が多いのである。先づ校舎の外形を見たゞけでも、この通り誠に見すばらしいものである。諸君の懐しく思はれる校舎ではあるが、誠に整はない情けないものである。設備の点から見ても日本に一つしかない音楽学校として万事不十分勝である。職員数の如きも明治四十二年の整理の際に縮減されたまゝ、二十年間何の変わりもなく其の儘になつてゐる…（略）…情けないとは思ふが、しかし過去を彼は言つたとて致し方がない、今茲に於て一大躍進するより外はないと考へる」<sup>26</sup>。新会長を迎えて会報記者は「今日こそ本当に従来十三回開かれた総集会に於て未だ嘗て味はつたことのない嬉しい集りであつた」<sup>27</sup>と結んでいる。

赴任から1年半を経過した頃、乗杉は赴任当初の印象を次のように語っている。赴任後数年間の彼の活動とも直結するので引用しておく。「余がこの学校に足を踏み入れての第一印象は何であつたか、不幸にして——余は敢て云ふ——それは魂の抜けたルインの様な感があつたのである…（略）…そこに払い除ける事の出来ない頹廢的の影のさしていた事は見逃し難い事実であつた。玄関正面の石段さへも破損のまゝに顧られずに、また壁は朽ちて雨もりの跡さへ歴然と見出されたのであつた。更に歴代校長の肖像は云はずもがな、初代校長の肖



像さへも無かつたといふ事に至つては啞然たらざるを得なかつた次第である」<sup>28</sup>。

乗杉の闘いの原点はここにあった。「啞然たらざるを得なかつた」光景に彼は落胆するどころか、俄然、闘志を燃やし攻勢に転じた。実際、彼の足跡を辿ると、新任校長の目に映った「魂の抜けたルイン」「頹廢的の影」「破損」「初代校長の肖像さへ無かつた」状態に対応する具体策が次々に講じられていく。

文部行政官のキャリアを迎えた昭和3年の官立音楽学校は、明治以来欧米に肩を並べようと懸命であった学校、進取の気象に富む学校、西洋音楽の摂取を通して官立ながらキリスト教精神が浸透する学校、その一方で日本の音楽学校としても課題山積、邦楽教育や邦楽調査掛の事業は行われていたものの、音楽学校における邦楽の位置づけはまだあやふやであった学校、「唱歌 当分これを欠く」とされた明治5年に比べれば隔世の感があるにせよ、国家における音楽学校ないし音楽教育の位置も基盤もお脆弱。これが赴任までは音楽学校などは文部行政管轄の一つにすぎず、音楽に造詣深いわけでもなく、特別な関心を懷く対象でもなかった行政官に与えられた仕事場であった<sup>29</sup>。

## 2-2-2 行事、出来事の急増と同窓会組織との連携強化

乗杉校長赴任後の数年間で、それ以前と比較してすぐに気付く著しい変化は、2点挙げられよう。第1点は、年譜に記されるべき行事や出来事が格段に多くなることで、その理由は昭和という時代に帰すよりは、学校内外に挑戦を開始した新校長の赴任にあると考えるのが妥当であろう。第2点は、学校と同窓会組織の連携強化である。最初の1年が過ぎる頃から顕著となり、昭和6年に今度は東京音楽学校校長として欧州視察を終えると、ほぼ一体化に近い状態となる。同窓会組織の機能が著しく強化されていくことも社会教育思想を根本に据えた乗杉時代の特徴で、学校と地域、社会との繋がりにより強固なものとなる。校長の地方出張などの際には、乗杉と面識のない古い卒業生も含め、それぞれの地方の同窓生が出迎え親睦を深めた。

校長の求心力は並々ではなく、東京音楽学校は卒業生にとって家庭的な温かみのある、文字通りの母校となった。年々増える卒業生が母校との信頼関係を築き、全面的に母校を支援する組織作りも「学校の社会化」の前提であった。

さらに昭和8年に上野児童音楽学園が開園すると、園児の父兄、すなわち家庭とも繋がり深めていく。そのことがまた学校の発展に少なからず貢献することとなる。このように学校を中心に個人、家庭、地域、社会、国家へと連携を広げ、強めていく運営のあり方も社会教育思想の実践であろう。

以下に挙げる出来事は、当時毎年発行されていた『東京音楽学校一覧』に印刷されている「沿革」からの抜粋である。ここだけ見ても特別な印象を与えるようなものではないかもしれないが、同校の明治30年代以降昭和初年あたりまでの沿革に記されている事柄は1年間に

平均2、3件。そのうち一つがオーケストラ初演曲という場合もあることと比較すると、乗杉赴任から3年半足らずで20の事柄が列挙されることだけでも何かが様変わりした感を懐かせる。

(1)3年10月神田区駿河台に分教場落成。(2)12月御大礼奉祝演奏会、皇后陛下行啓。(3)皇族便所3坪7合5勺新設。(4)同月本校の演奏を初めてラジオ放送。(5)4年4月選科学科目に長唄増設。(6)7月従来校内でのみ開催していた演奏会を初めて日本青年館において行い、以後、定期演奏会を日比谷公会堂で行う。(7)同月分教場落成披露演奏会において初めて生徒の長唄演奏を公開。(8)9月日本教育音楽協会及び同声会より小山作之助の胸像の寄付を受け分教場前庭に建設。(9)11月創立五十周年記念事業。(10)5年6月皇太后陛下行啓、洋楽と邦楽の演奏会。(11)7月初代校長伊澤修二の胸像を同声会より寄付され前庭に建設、除幕式。(12)9月女生徒に洋服着用を許可。(13)11月選科に新たに能楽(謡、男生徒のみ)を加える。(14)同月分教場に長唄教室と渡り廊下新営。(15)6年2月定期演奏会を年2回から3回に変更。(16)3月分教場に能楽会より能楽教室46坪2合の寄付。(17)4月男生徒の制服を改定。(18)4月本科に作曲部を加える。(19)同月予科に管楽器専攻志望生の入学を許可。(20)同月外国人教師を5人に増員(うち傭教師4人)。

上記は、1) 教育内容や制度、2) 教育設備および環境、3) 対外的な関わり、4) 社会に向けての発信、に大別されようか。しかしそれらは同時に、a) 生徒の陶冶、b) 学校の拡充、c) 社会ないし国家とのつながり強化、d) 音楽学校の地位の向上、といった意味を併せ持ち、しかも実際には一つの事柄が1)～4)、かつa)～d)の複数にわたることも少なくないため、ここではあえて分類せず、現在では具体的な内容をあまり知られずに記載されがちな東京音楽学校時代の沿革について順次取り上げる。また上記以外の事柄や補足がある場合には年ごとに適宜「=付記=」を入れる。

上掲のなかには従前の計画が実行されたものもある。昭和2年8月の『同声会会報』に紹介された村上会長(村上直次郎校長)の挨拶より。「学校の新築は来年度から始まるが、多分分教場の方がさきになるであります。・・・(略)・・・外人教師の増員を計ること、とか、いろいろ沢山にあるのですが、国家の財政の現状ではなかなか思ふ様にまゐりません」<sup>30</sup>。つまり上掲(1)をはじめ校舎を新築する予定はあるが、外国人教師の増員などはまだ見通しが立たないという報告である。(8)の小山作之助の胸像建設も乗杉赴任前からの計画であったが、実際に建設された4年9月までには乗杉の采配が随所に揮われている。すなわち(2)以降は乗杉の考え方や方針が大きく影響していると考えて良からう。

## 2-2-3 第1期(昭和3年4月～6年8月)の出来事

### (1) 昭和3年10月神田区駿河台に分教場落成

分教場は震災後、新しく土地を確保し、東京音楽学校の分教場とするために建てられた。

教育設備の整備、音楽学校としての教育事業の整備、また専用の校舎ができたことによる教育内容の充実、そして分教場は広く社会に開かれた音楽教育の場であったことから、「学校の社会化」に貢献するものであった。彼の社会教育論とも合致する教育施設が誕生したこととなる。

## (2) 昭和3年12月御大礼奉祝演奏会、皇后陛下行啓

『昭和三年度東京音楽学校年報取調条項』の「概要」に「本年度ニ於イテ行ハセラレタル御大礼奉祝ノ微衷ヲ表スル為大礼奉祝合唱歌外四種ノ歌詞並曲譜ヲ謹製シテ献上ヲ出願シタルニ之ヲ採納アラセラレタルノミナラス十二月十二日ニハ皇后陛下本校ニ行啓アラセラレテ右奉祝歌曲ノ演奏ヲ聞召サル、ノ光荣ニ浴シタリ」と記されている。大礼奉祝と皇后陛下行啓の件が当年度の概要全体の半分を占めていることから、同校にとっていかに大きな出来事であったかが推察されよう。

昭和3年の御前演奏は、一、皇室との関わり。二、国家との関わり。三、同校における邦楽分野拡充 において特に重要である。

御大礼奉祝演奏会は、大正4年12月以来であり、皇后陛下行啓もこの時以来となった。しかも大正年間、行啓はこの一回限りであるが、乗杉時代は昭和3年を嚆矢として以後折々に皇族を迎えての御前演奏を行うこととなる。これが大きな違いである。皇族を迎えることが、特にこの時代において晴れがましく意義深い事であったのは勿論であり、学校が社会に対しても国家に対しても一定の尊厳を保つこととなるばかりか、音楽学校生の本分である音楽によって皇族を迎えることができるという意味で、教育的効果も大きかったはずである。

皇室に対する乗杉の崇敬の念は、当時の国民一般に浸透していたレベル以上であったように思われる。それは文部省社会教育事業の促進において皇室との関わりが「一大光彩」を放ち「皇室の恩恵に浴して成つた」恩義を実感した経験によるのであろう<sup>31</sup>。

大礼奉祝と銘打った演奏会は12月12日、22日、23日と3日間行われ、このうち皇后陛下行啓は12日であった。来臨された皇族は14名、ほかに宮内省、文部省、大蔵省関係の勅任官と同夫人が陪聴を許された。皇族、来賓に続いて午前10時に皇后御着、校長室で校長、鉄道大臣、大蔵大臣、貴族院議長、枢密顧問官、文部次官、音楽学校教師等18名に個人拝謁、同校教師11名に列立拝謁を賜った。定刻10時20分邦楽の部、正午から1時間の食事と休憩、午後は洋楽の部で演奏時間は1時間半と記されている。

当日の邦楽のプログラムは、一、《石橋》、半能《連獅子》、狂言《首引》。二、常磐津節《露の八千草》。三、江戸長唄《御代の曙「山の巻」》。四、箏曲《聖の御代》。五、《御代の曙「海の巻」》。

上記二～五はすべて新作であったが、それが可能になったのは明治40年以来同校に設置されていた邦楽調査掛によるところが大きく、作曲者はみな邦楽調査掛の関係者であった。《露の八千草》は岡鬼太郎作、常磐津豊後大掾曲。解説書によれば「大御代の恵の露に潤ふ民草

が、取入れ時の喜びを叙して、聖代を祝し奉ったもの」。《御代の曙「山の巻」》は中内蝶二事  
中内義一作、今藤長十郎曲。「富士の霊峰に寄せて、大礼時の天地に充ち満てる悦を叙したも  
の」。《聖の御代》は尾上八郎作、今井新太郎曲で、「京都への御発車、紫宸殿の御義、及び大  
嘗祭の光景を叙して御代を寿いだもの」。五《御代の曙「海の巻」》は山の巻の姉妹編で、中  
内義一作、吉住小三郎と稀音家六四郎の曲。「大漁豊鯊の舟人が大礼時に於ける夜明の入港お  
よび大漁踊を叙して。浦安の国を寿いだもの」である。

洋楽は、オルガン伴奏《君が代》に続き、歌詞高野辰之謹作、曲譜信時潔謹作による《大  
礼奉祝合唱歌》が4名の独唱と270名の生徒合唱とピアノ伴奏により演奏され、最後にベー  
トーヴェンの《荘厳なるミサ》がラウトルupp指揮、安藤幸のヴァイオリン独奏、4パート  
各2名の独唱者、生徒合唱、東京音楽学校と海軍軍楽隊員の管絃楽で演奏された。

御前演奏は昭和3年時点では官立音楽学校らしい晴れの行事以外の何ものでもなかった  
が、その意味するところはまさに学校の国家化であり、いずれ誰にも止められない勢いでそ  
の奔流に巻き込まれ色彩を鮮明にしていくことになる「音楽の国家化」への確実な伏線とも  
なった。しかしこの方向は乗杉の社会教育思想によってのみ推進されたのではない。さらに  
強力な推進力——すなわち「国楽創成」を理念に掲げた明治の音楽学校建学の精神が働いて  
いたと考えられよう。なぜならば「国楽」とは「東西二洋の楽」から作られる作品自体を指  
すにとどまらず、国の楽として国家の適切な場で適切に演奏され享受される、存在の仕方を  
も意味するからである。

ところで昭和3年の行啓は、皇族の来臨ということだけではなく、御前演奏の場に文部省  
関係者と、邦楽予算を渋る大蔵大臣も招待して邦楽と洋楽を演奏したことが後々大きな意義  
を持つこととなる。

昭和4年2月の『音楽世界』に「面目を一新する東京音楽学校」という記事が掲載された。  
記事は4年度以降2年間継続予算で同校が新築工事をするようになったことに加え、乗杉赴  
任後に邦楽重視の新たな方針が打ち出されていることを伝えている。「従来学校騒動に日を暮  
して居た同校が斯く発展するに至つたのは邦楽科の新設に機縁を持つものである。昨年就任  
した乗杉校長は東洋一の音楽学校であり日本唯一の官立音楽学校に日本固有の邦楽科を設け  
ずして洋楽のみを教授するは不徹底であると感じ昨年邦楽科（能、謡曲、箏曲、浄瑠璃、長  
唄、常磐津の如き）設置費五万円の予算を議会に提出せんとしたが大蔵省の反対にて削除さ  
れ、勝田文相が閣議に於て復活を試みたるも急を要せずとの理由で通過しなかつた」<sup>32</sup>。新校  
長は赴任間もない頃から邦楽科設置に向けて働きかけていたのである。文部省時代に日本文  
化の重要性を主張した乗杉は、大正6年の欧米視察後は学校改造や教育改造を訴える論述を  
行つたが、自国文化を重視する姿勢が失われたわけではない。諸外国に学んでいっそう国力  
を高めていくという姿勢を貫いている。東京音楽学校には唱歌編纂や祝日大祭日唱歌の制定  
などの国家的な事業を担う流れから洋楽の導入と育成を急務とした。しかし時すでに創立50

年。音楽学校の現状を見渡したとき、乗杉の日本の教育に関する考え方からしても邦楽の比重は極端に軽く、建学の精神から見ても不甲斐なく思われたことであろう。

前出の記事はさらに続く。「然るに昨年十二月十二日皇后陛下各宮殿下行啓台臨を仰ぎ御大礼記念大演奏会を催し洋楽の外に邦楽部の能、謡曲、箏曲、尺八、長唄等を演奏したるに各大臣より或は邦楽反対の大蔵省より非常な礼讃があり、成程同校に邦楽科設置は最も必要なりとの折紙を付けられたので本年は同科設置の予算は殆ど通過するといふ確信がついたことに依る」<sup>33</sup>。

すなわち御前演奏における邦楽が功を奏し、同校の邦楽分野を強化するうえで、文部省はもとより大蔵省に対して説得力があったというわけである。従来東京音楽学校では洋楽と邦楽が一つの演奏会に組まれるスタイルは珍しいことではなく、大正5年の御前演奏の際にも洋楽と邦楽の両方を演奏しているが、邦楽の分野を拡充しようとしていたこの時期に、国を挙げての晴れ舞台で邦楽が披露されたことの意義は大きかったと言えよう。

邦楽科設置への動きとともに、昭和5年2月には宮城道雄が新たに選科箏曲科の講師に迎えられる<sup>34</sup>。

### (3) 皇族便所3坪7合5勺新設

皇后陛下行啓に伴い「皇族便所」が新設された。皇族の休息される部屋すなわち「御便殿」である。その後も皇族を迎えるたびに、乗杉を赴任当時啞然とさせた校舎の「破損」が少しずつ手入れされていった。同声会誌にもそのことを伝える記事がある。「光荣ある行啓を仰ぐ為めに校舎の塗換をなし、廊下にリノリウムを敷き詰め校庭樹木の手いれに至るまで万遺漏なきを期するため目下全校を挙げて総動員の姿で準備中とのことである」<sup>35</sup>。当時の生徒にとってもそのあたりは印象深く、昭和4年に入学して後に本学ピアノ科教授となった水谷達夫は「乗杉校長はよく演奏会に宮様を呼んでこられましたね。学校のペンキがはげてきたり、庭が悪くなってくると宮様を招待されるんです。そうするとすぐきれいになったものです」と語っている<sup>36</sup>。乗杉は皇族の招待に限らず色々な機会に「頽廃」を駆逐すべく校内の美化に努め、早くも数年で結果を出したのであろう。昭和5年にピアノ専攻に入学した指揮者・金子登は乗杉校長と当時の校舎について「文部省に顔が利いたせいか、予算を取るのがお上手でした。…（略）…乗杉さんの顔利きのおかげで、予算は取れる、校舎はきれいになるで、あの当時の学校でセントラル・ヒーティングがあったのはあそこだけだったでしょうね…（略）…少なくとも僕らが入ったころ、学校はとてもきれいでしたよ」と回想する。もちろん学校がきれいになったのはそれ相応の努力の結果である。金子氏は校長の「細かいことにうるさい」「廊下を歩いていて塵が落ちてしていると拾って歩く」「ガラスが汚れていてもすぐに小使いを呼んで掃除させる」<sup>37</sup>といった一面も語る。緊張感ある日常風景を彷彿とさせる話である。まず自分が動いて人も動かす、即断即決即行動、この性急さが東京音楽学校の変革に結びついたことは確かであろう。



水谷、金子両氏の回想と同声会誌だけをみても、乗杉が足を踏み入れてから目を見張る勢いで校内が手入れされ改善されたことが想像されよう。皇族をお迎えするという機会を最大限活用して国とのパイプを強くし、教育的効果を上げ、校内整備に努めた。そのことで多忙になった人間も多かったはずであるが、周囲の反発をものともせず推し進めた信念の根幹にはやはり、学校教育は社会化することによってはじめて完成するという社会教育思想を見ることができるのではなかろうか。

乗杉が赴任早々校舎の修繕に力を注いだのは、一国の顔となる官立音楽学校として最高の状態を思い描き、その実現方法については行政官の勤が働いたからであろう。皇室との繋がりがもたらす絶大な精神的・物質的恩恵を充分心得ていた乗杉ならではの采配と言えよう。乗杉が行政官の目で客観的に同校を捉え、関係省庁への実効ある働きかけを行ったことが功を奏したと言えるのではなかろうか。

#### (4) 昭和3年12月本校の演奏を初めてラジオ放送

御前演奏がラジオ放送された。『同声会会報』には「尚此の日の栄えある演奏は宮中のご都合を伺うた上“お差支なし”といふ有難き御沙汰を拝し関係者一同は感激し東京放送局は細心の努力をもつて此の光栄を全国大衆に分つた」<sup>38</sup>とある。同校演奏のラジオ放送はこれが最初となり、その後たびたび行われるようになる。

#### ＝昭和3年付記＝

1. 昭和3年10月発行の『同声会会報』は、新任校長が卒業生との接近を希望し、演奏会に来校した卒業生とも茶話会を催して歓談したことを記し、来校の際には必ず校長を訪ね懇談し記帳するよう呼びかけている<sup>39</sup>。また同じ号の編集後記「編輯子より」においても「校長乗杉先生の就任以来の矢継ぎ早やの御計画や御活躍で、いろんな改革や創設が行はれ、為めに通信の材料が頗る豊富なのであります。母校のため斯道のため同慶に堪へない所であります」<sup>40</sup>と様変わりして忙しくなった様子を記している。12月発行の第143号では、会報が以前より充実し、母校の様子がわかりやすくなったことを喜ぶ卒業生の声が掲載されている。母校を社会に出た卒業生と結ぶことは乗杉社会教育論では基本中の基本であろう。

2. 校長の「矢継ぎ早」の計画や活躍で多忙になったのは同声会だけではない。教授会規程、評議員会規程、担任教官規程、生徒心得大綱、生徒心得細則、生徒総代規程、事務分課規程等の校内規定の設定及び改定が行われた。新任校長の赴任初年度中に一気に行われ、刷新の空気が行き渡ったことは想像に難くない。文部省からの通達や専門学校令に基づく規則改正とは別にこれだけ多くの改定や設定が行われたことは、同校でも空前絶後であろう。

#### (5) 昭和4年4月選科学科目に長唄増設

大正12年に設けられた「選科規程」第一条には「選科ノ学科目ハ唱歌、ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、セロ及箏トス」と規定され、昭和3年まで引き継がれていた。東京音楽学校における選科の歴史は古く、明治22年に規程が設けられた当初からあった。入学年齢は男女

満9歳以上、当初の選択肢は「洋琴、風琴、バイオリン、唱歌」で、そのうち1～3科目まで選ぶことができた。明治31年の規程では箏が加わる。所定の授業料をおさめれば東京音楽学校の教師にレッスンを受けられるとあって、趣味あるいは受験を志す子供から社会人の稽古事まで幅広く利用されていた。社会教育の観点からしても好ましいシステムであったといえよう。

選科に長唄の生徒が増えることは、受け入れる音楽学校側では分教勤務あるいは兼務の教員が増え、教室も必要になる。邦楽科設置が難題となれば、小さなこと一つでも駒を進めておくのが乗杉流である。

**(6) 昭和4年7月従来校内でのみ開催していた演奏会を初めて日本青年館において行い、以後、定期演奏会を日比谷公会堂で行う**

7月1日、日本青年館において特別演奏会。ローベルト・シューマン作曲、独唱合唱管絃楽のための《楽園とペーリー》がシャルス・ラウトルupp指揮により演奏された。『音楽世界』の評者は、演奏に対しては物足りなさを表明しているが、校外の会場で演奏されたことに賛意を表明している。「音楽学校が日本青年館に出たことは頑迷にして官僚的な音楽学校長の大きな手柄であつた」<sup>41</sup>。この批評に限らず、良きにつけ悪しきにつけ校長に対する「官僚的」というレッテルはついて回る。同年11月30日、創立五十周年記念の洋楽演奏会が日比谷公会堂で行われ、翌年以降、定期演奏会は日比谷公会堂で行われることとなる。学校が社会の中心に自ら出て行く社会教育論の実践の一例であろう。

**(7) 昭和4年7月分教場落成披露演奏会において初めて生徒の長唄演奏を公開**

7月6日午後、神田区駿河台鈴木町分教場において「分教場新築落成披露会」が行われ、選科生によるピアノ独奏、ヴァイオリン独奏、箏曲、長唄、東京音楽学校生徒と第四臨時教員養成所生徒による合唱、海軍軍楽隊による吹奏楽があった。長唄は設置からわずか3ヶ月で演奏を披露している。入学直後から演奏会に向けて取り組んだのであろう。このときの長唄に対して『「長唄」の一大革命』と題する記事が雑誌『音楽世界』に掲載された。「駸々乎として底止する所の知れない文化は遂にタクトを揮つて長唄を謡はせることにまで進んだ」<sup>42</sup>と驚きを表明する文面で始まり、長唄演奏の様子を伝えている。記事のおかげで、長唄の第1期生38名が一斉に舞台上で演奏する情景も思い描くことができる。「長唄科在学中の第一期生卅八名が本職の囃子方入で《鶴亀》《寒山拾得》《西王母》を合奏し、長唄科主席教師吉住小三郎が日本国始まつて以<sup>(ママ)</sup>ら未だ曾て夢想もしなかつた長唄の型を破りタクトを揮つて指揮することになった、長唄にタクトを揮るのは破天荒の試みで洋楽の夫れとは違ひ今までの立三味線のヤア、オイの掛声に引つけられて調子を揃へたと同じに往くかどうか疑問だが音楽学校では必ず出来るものと信じ引続き官学式として之を実行することにも決定してゐる」<sup>43</sup>。批評の終わりの方で「官学式」と名付けられた演奏スタイルは、予告通り、東京音楽学校の長唄演奏会で引き継がれていく。

**(8) 昭和4年9月日本教育音楽協会及び同声会より小山作之助の胸像の寄付を受け分教場前庭に建設**

小山作之助は明治16年に音楽取調所に入学し、明治20年から大正15年まで（明治38年9月いったん退職し大正2年復職）同校で後進の指導に当たり、昭和2年6月に65歳で亡くなった音楽界の功労者。日本教育音楽協会の初代会長であった。当初お茶の水の分教場に建設され4年9月に除幕となった胸像は、その後分教場が昭和29年音楽学部附属高校となり、さらに同高校が平成7年に上野に移転した今、音楽学部上野校地で伊澤修二の胸像近くに並んでいる。「昭和5年付記」に後述するように、乗杉は半年後、日本教育音楽協会の会長となる。

**(9) 昭和4年11月創立五十周年記念事業**

昭和4年に明治12年の音楽取調掛設置から50年目を迎えた同校は、11月28日から12月2日の5日間にわたり記念事業を行った。同年7月の同窓会誌では特に「東京音楽学校校長 東京音楽学校同声会長 乗杉嘉壽」名で「緊急会告」が掲載され、50周年の趣意書、寄付依頼、祝賀事業計画と概算が記されている。内容は、記念式並び祝賀会、功労者並び永年勤続者表彰、初代校長胸像作製建設、沿革編纂並び印刷配布、記念図書楽器等展覧会、演奏会3回、音楽教育研究大会、奨学資金募集であった<sup>44</sup>。

さて11月28日の創立50周年記念式典当日は「朗かな黎明を告げて一天拭ふが如く晴れ渡り、宮様日和といはふか、音楽日和といはふか、しかも小春のやうな暖かさ」<sup>45</sup>であった。午前は式典と邦楽演奏。正午から2時間を祝賀会に充て、2時から洋楽演奏であった。式辞のなかで校長は、新国楽の創成と興隆を目的として創設された同校が初めは和洋両楽の攻究と教授に努め、中頃よりは専ら洋楽の研鑽と修得とに力を注ぎ、全国の唱歌に範を示し、国民に対して洋楽への理解を広めてきた実績をあげる。一方、現状と課題については「熟々我邦音楽ノ現状ヲ考フルニ普ク新時代ノ人々ニ満足セシムヘキ新国楽ヲ大成センニハ前途眞ニ杳<sup>(ようえん)</sup>遠ニシテ本校創設ノ大目的ハ俄ニ達セラルベクモアラズ」と、模擬を戒めいかなる困難も押し切って日夜創造に努めるよう激励した<sup>46</sup>。記念演奏は皇族12方、来賓400名余、卒業生全体の半数にあたる600名余を迎えて行われた。皇族が別室で昼食をとられる間、来賓卒業生職員生徒1600名は裏庭の祝賀会場で40余のテーブルを囲み海軍軍楽隊の吹奏を楽しみながら歓談した。奏楽堂に入場しきれない盛況であった。校長は、校地の狭さや校舎の設備の不十分さに触れ、会場となっている裏庭もひとたび雨が降れば「脛ヲ没スル位一面ノ泥海トナリ サマザマノ水鳥等ノ集テ来ル」<sup>47</sup>とユーモアを交えた挨拶を行った。卒業生は朝鮮、台湾、樺太からも参集した。

演奏会曲目については『東京芸術大学百年史 演奏会篇第2巻』、記念事業については『同東京音楽学校篇第2巻』に掲載されているが、舞囃子《竹生島》と小舞《宇治の晒》《北嵯峨》は教師と卒業生による舞台、箏曲《友千鳥》は教師2名、長唄は選科長唄科在學生により《鶴亀》と新作《千代見草》が演奏された。長唄の演奏写真には、40名近い出演者が舞台中央に

横3列ほど三味線が腰掛け、左右に唄が譜面を持って立っている。7月の分教場落成披露演奏会で評者を驚かせた「官学式」スタイルである。『時事新報』が当日の祝賀行事を伝えているが、記者の目を奪ったのはやはり長唄の舞台で、「中でも長唄新曲千代見草は長唄科専科在学男女生徒（三味線十九名、唄十九名）が一ヶ月半の練習で仕上げたもので起立して楽譜を手にして唄ふ西洋式である」<sup>48</sup>。午後はヘンデル作曲《ユーダス・マカベウス》がラウトルupp指揮、教師6名の独唱、生徒合唱、東京音楽学校管絃楽団により演奏された。

5日間の祝賀行事は28日が記念式と演奏会と祝賀会、29日と30日には音楽学校が全国中等学校関係者に呼びかけて音楽教育研究大会が催され、協議と研究発表と講演が行われた。協議では「師範学校における楽器教授の徹底を期するには如何にすべきか」「男子中等学校生徒の音楽趣味を良導する方法如何」などがテーマとなったが、そのなかに「学校音楽を一層社会化せしむる方法如何」「学校音楽をして社会的音楽たらしむる方案如何」という協議2題が含まれているのは乗杉の提言と思われる。乗杉自身の課題でもあったろう。赴任1年半、東京音楽学校の歴史と使命と自らの社会教育論の接点を乗杉はすでに見出し、音楽ないし音楽教育ないし音楽学校についての理想や将来像を次第に明確化させていたものと考えられる。

研究発表は現場の学校教諭によるもの、講演は東京高等師範学校教授・神保格による「日本語の音声について」と東京帝国大学教授・春山作樹による「音楽教育について」であった。29日夜は祝賀晩餐会、余興の始まりは校長の手品であった。30日夜には日比谷公会堂で記念演奏会。《君が代》《祝歌》《ユーダス・マカベウス》が演奏された。12月1日は職員・生徒・卒業生合同で学友会祝賀会。午前は運動会、午後は奏楽堂で余興の数々。12月2日最終日は再び音楽教育研究大会で女高師附属高女、青山師範、女子師範の音楽科の実地授業を参観した。

50周年記念事業を成功裡に終えたことで、校長は学校音楽を社会的音楽とする方向を見定め、以前にも増して確信を持って音楽に関わるようになる。50周年は乗杉にとっても重要な節目ともなった。

#### ＝昭和4年付記＝

1. 3月9日恒例の卒業生送別会も趣向を変え、「卒業生送別大運動会」となった。寿司、おでん、汁粉、果物などで団欒の後、種々の競技に加え、教職員総出の林檎釣り、目隠し鉢割、小使総出のスプーンレース、福引きなどあり、校長の発声で万歳三唱して散会した。入学志願者の増加も報告され、色々な面で活況を呈してきた様子が窺われる<sup>49</sup>。

#### (10) 昭和5年6月皇太后陛下行啓、洋楽と邦楽の演奏会

午前は邦楽、午後は洋楽であった。邦楽の演目は能楽《鷺》、長唄《安宅 勧進帳》、清元《隅田川》、踊《京鹿子娘道成寺》で、出演者の記録を見ると生徒が加わっているのは最後の《京鹿子娘道成寺》のみで、生徒一名が踊り、唄と三絃と囃子に職員生徒が出演している。6月7日にお披露目された能舞台が用いられた。洋楽は眞篠教授によるオルガン独奏、ペー



トーヴェンの交響曲第3番、澤崎囑託によるベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番第1楽章、シューベルトの《変イ長調ミサ》で、最後に《君が代》が合唱された。このうちオルガンとピアノは特に皇太后自身のご希望により当初のプログラムに追加された。

御前演奏に先立ち、洋楽と邦楽が2日に分けて奏楽堂で予行演奏され、同声会員は聴きに行くことができた。7月にはプログラムを一部変更して日比谷公会堂において有料で行われ、ラジオ放送された。一つの御前演奏が5回の演奏会になり、放送された。乗杉社会教育論においては演奏会は音楽学校と社会とを結ぶ手段となり、マスメディアも音楽の社会化、すなわち社会教育のツールとなるのである。

#### (11) 昭和5年7月初代校長伊澤修二の胸像を本校前庭に建設、除幕式

胸像除幕式における校長の「頌徳文」に「瞻<sup>(せんぎょう)</sup> 仰スレハ老松古木ノ間 先生ノ威容生ケルガ如シ 精悍ノ氣眉宇ニ溢<sup>(けんがく)</sup>レ譽<sup>(いやく)</sup> 謬ノ誠輔車ニ高シ 苟<sup>(しんかい)</sup> モ道ニ樂ヲ志ス者誰カ箴<sup>(しんかい)</sup> 誠ヲ享ケザラン」<sup>50</sup>という一節がある。50周年記念に初代校長を顕彰し胸像建設することで、東京音楽学校の原点と向き合い、建学の精神に立ち返る。樂恩ある先達を身近に感ずる。創立時への意識が薄れていく50年の節目に相応しい行事となった。

同年9月、第2学期の始業式、校長は訓示のなかで伊澤校長の遺徳を称え、2階校長室の窓から外を見ていたところ登校してくる生徒が「伊澤先生の胸像の前までゆくと立止つて恭しく頭を下げるではないか。それから舎の方へ姿を消した」のをみとめ「なんといふ清々しい何といふ敬虔な美しい光景であつたろう。誠に有難い事であつた」<sup>51</sup>と述べた。資金集めの苦勞も報われた思いだったのではないか。

本稿2-2-1に乗杉が赴任当時の印象を語った言葉を引用した。その終わりの方に「歴代校長の肖像は云はずもがな、初代校長の肖像さへも無かつた」<sup>52</sup>というくだりがある。現在、伊澤修二以下、歴代校長の写真が一枚ずつ額に収められたものが音楽学部保管されている。乗杉時代に調べられ応接室にでも並べて掛けてあつたのだろう。赴任当初の乗杉の思いは一つずつ形にされていった。

#### (12) 昭和5年9月女生徒に洋服着用を許可

翌6年4月に男生徒の服制も定められ、『東京音楽学校一覽』に記されるので(17)にあわせて後述する。

#### (13) 昭和5年11月選科に新たに能楽（謡、男生徒のみ）を加える

この件は『学事年報』の規程の項に記されている。翌年1月から募集された。

『同声会報』は「能楽科新設」という見出しで「今回更に能楽科が選科に新設される事によつてここに邦楽が国家的支持を受けて大きな更生の堵についた。このニュースは斯界に異常なセンセーションを起してゐる」<sup>53</sup>と伝えた。

センセーションを起こしたのは、観世流家元の観世左近氏が能楽界のしきたりを破って「出教授」することになったからである。教室の都合がつけば将来は他の流派も加える見込みで



「乗杉校長の努力もやがて実を結ばふとしてゐる」と伝えている。入学資格は年齢12歳より30歳までの男子、30名募集となっている。選科であっても国費によって邦楽が育成されることに変わりはない。

#### (14) 昭和5年11月分教場に長唄教室と渡り廊下新営

『同声会報』に「長唄科教室新築披露」という見出しで記されている。「乗杉校長の努力に依り過般長唄科否邦楽専門の教場二室が分教場内に新設され邦楽教授能力を一層高め長唄科設置の目的達成のためにも甚だ便利となり…」<sup>54</sup> 教室は文部省から交付されたもので文部省関係者30余名を招いて長唄の授業参観が行われたとある。

#### ＝昭和5年付記＝

1. 社会教育論の発露。乗杉校長赴任以来、『同声会会報』は編集内容が格段に充実し、母校と卒業生を結ぶ機能を強化していく。校長が会長を兼務することは従来通りであるが、学校と同声会がより一体感を増して活動する姿が目立つようになる。会報は母校の様子のみならず、校長の考え方を伝え、母校の現在と卒業生の現在の生活や気持ちとの距離を縮めていったように思われる。会報が会長の意見や動向を好意的に伝えるのは当然のことであるが、徐々に校長の社会教育論的な観点が学校関係者に浸透していく様子が読み取れる。

元来「社会」という言葉は広く一般的に用いられる言葉ではあるが、会報の中にも社会を意識した考え方やメッセージが少しずつ強化されていく。昭和5年2月の会報編集後記には「(上野の杜の)希望が、熱が、そして若さが飛躍するその波紋の大きなウネリが、社会に伝はつていくだらう」「力と熱との乗杉校長を戴く母校」<sup>55</sup>といった言葉が見られる。同じ号で、校長の提唱により唱歌編纂事業に乗り出すことが書かれており、その目指すところは「現代青年男女の実生活の向上醇化の為の歌詞歌曲の編纂」「街頭に於ても学校に於ても同時に歓迎されるべき歌曲」「日本民族性を多分に内容とする学校音楽と、街頭音楽の創生を志す」とし、しかも「本校のみの独占する社会教育的職能」<sup>56</sup>によって世間一般に呼びかけるものであると記している。校長の影響力が同声会に浸透している様子が見てとれよう。

2. 社会教育論の実践例。昭和5年5月10～12日、同校内において「文部省高等小学唱歌講習会」が開かれた。日本教育音楽協会主催、東京音楽学校と文部省の後援であった。日本教育音楽協会は小山作之助初代会長が死去してから会長不在のままであったが、5年3月に乗杉が二代目に就任した。250名を定員とし、東京音楽学校の声楽教師たちによる唱歌の練習や発声についての指導があり、初日の午後は演奏会であった。同校教師によるオルガン独奏、ソプラノ独唱、ヴァイオリン独奏、そして生徒の合唱があった。

御前演奏も例外ではないが、カリキュラムの中で組まれている演奏会以外に職員生徒が出演する機会が増えていくのも乗杉時代の特徴である。このような場合、多くは比較的近い時期に定期演奏会や前々から計画のあった演奏会で本番を経験した曲が取り上げられた。教師たちは生徒に演奏を聴かせる緊張感に包まれ、生徒は将来の自分をそこに重ね合わせたこと

であろう。いずれにしても正規のカリキュラム以外の日程で本番が組まれ、休日返上もあり、学校全体が多忙になったことは間違いないが、社会に開かれた学校のあり方としては、皇室、教育関係者、一般家庭などなるべく多くの接点を持つことが必要であり、こうした活動も社会教育には必然的に含まれるものであろう。

3. 昭和5年2月の会報の編輯後記に「乗杉校長や幹部諸公の朝から夜更ける迄の大童の活動振を見ると涙ぐましくなる程だ」「われ等にとりては仕事即生活であり、自己即学校だといふ信念がいよいよ深くなつてゆく」<sup>57</sup>とある。会報のページ数が増え、教職員の意識に急速に変化が生まれたことも乗杉采配の一つの結果であろう。

4. 5年6月7日 能舞台開き。

東京音楽学校時代に作成された沿革に記載されていないために、「演奏会篇」でも「東京音楽学校篇」でも取り上げられなかったが、今後年譜に加えられて良い出来事であろう。

昭和5年4月の会報記事に「能舞台の寄付」がある。「行幸啓其他の場合に於て従来の如く奏樂堂の板張の床上にて演能するを見るに忍びずとなし今回、徳川家達公爵 細川護立侯 中御門侯 松平頼壽伯 林博太郎伯 戸田康保子 京極高備子 近藤滋彌男 安田善治郎氏 三井元之助氏 櫻井小太郎氏 久米桂一郎氏 中尾眞吉氏 池内信嘉氏の諸氏より檜造の敷舞台を寄附せられた」<sup>58</sup>。次号の「能敷舞台新設」という記事は6月7日午後2時より祝賀能が行われる予告で「座席の有無は保証出来ないが同声会員の御入場は歓迎する」<sup>59</sup>。上掲の人々のうち、戸田康保、櫻井小太郎、久米桂一郎、中尾眞吉は当日の出演者でもある。

御前演奏などの際に必ず邦楽と洋楽をとともに披露していたことが能舞台新設に繋がったのであろう。そのような場合に出演する邦楽調査掛や能楽囃子養成の関係者は皆、斯界で名の通ったプロであった。また御前演奏のさいには、皇室の意向を伺った上で、其の時々可能な限りの来賓を招待し、音楽学校の演奏を披露し、校長挨拶では同校の歴史と現状などを繰り返し述べ、学校発展のきっかけを増やした。学校を社会に開き、また御前演奏など、学校の質や格をさらに引き上げるチャンスを積極的に生かす、校長にして行政のプロの面目躍如と言わざるを得ない。

5. 日本教育音楽協会主催により、9月にも12週連続の唱歌講習会が東京府と近県小学教員、幼稚園保姆を対象に行われた。同協会は講習会の企画や図書・楽譜の出版などを行い、乗杉が会長であることから東京音楽学校で行われることが多くなる。その模様も『同声会会報』によって知ることができ、社会教育的観点からは重要な活動である。

6. 5年には生徒の合唱によって祝祭日唱歌のレコード吹き込みも行われた。基準となる歌い方を示す目的であった。音楽を通じて社会と国家に貢献するという使命を担う学校であることは創立以来一貫したものである。

7. 演奏会の回数についてはその範囲や数え方により異なってくるが、同年、生徒が学校主催の演奏会に出演した回数でも20回を越える。乗杉が同声会長として卒業生に向けて報告し

た「一九三十年を送る」においては「披露演奏会の盛大なりし事など今思ふても膚に粟の生ずる感がある」と述べ、学校と学友会の演奏会が「二十有六回を算し」たとある<sup>60</sup>。

#### (15) 昭和6年2月定期演奏会を年2回から年3回に変更

『東京音楽学校一覧 自昭和九年至昭和十年』（以後、「同 自昭和十六年至昭和十七年」まで）の「沿革略」に記載されている。同書では「音楽演奏会」と記載されているが、実際は洋楽の定期演奏会を指し、他にも学友会演奏会、邦楽演奏会、特別演奏会などが行われている。

#### (16) 昭和6年3月分教場に能楽会より能楽教室46坪2合の寄付

昭和11年の邦楽科設置に繋がっていく重要な出来事である。この件は同年5月に「名流を網羅して能楽堂開き」という記事で現れる<sup>61</sup>。それによれば、徳川家達公を会長とする財団法人能楽会から麹町区山下町旧華族会館隣にあった能舞台を寄附され、神田駿河台の分教場裏に移して能楽科教場とすることになり2月にすでに移転完成したとある。記事は5月10日に能舞台開きとなり、徳川家達公がはじめて公開の席で《翁》を舞い、各派の家元が出演し囃子も名流のアマチュアが揃い能楽界空前の壮観であると記している。官立音楽学校の施設にと寄附の申し出があること自体、選科邦楽の増設や公開演奏など、地道な努力の成果であろう。

5月10日の能楽堂開きについては改めて記述しないので、ここでまとめておく。校長挨拶より抜粋——まず能楽会関係者に丁重に謝辞を述べ、能楽関係者を前に、赴任以来邦楽分野に力を注いできたこと、将来の目標についても他では見られないほど力説する。「元来本校に於ては此れまで専ら洋楽のみに力を注ぎ数年前までは僅かに所謂「アマチュア」の為に選科として箏曲のみが置かれてありそれも生田流は入学者が一人も無くなつて満三年前小生赴任の折は山田流箏曲に於て僅か二三人の生徒があるばかりで誠に哀れな状態でありました爾来鋭意邦楽施設の進展を図りまして先づ三味線楽として長唄を入れ目下三年級まで百有余人を有し次で箏曲生田流を再興して宮城道雄氏を入れ更に本年度当初に山田流にも改善を加へ中能島欣一氏を入れて現に五十名近くの生徒を有し更に本年一月より新に能楽を加へ三十有余名の生徒を収容し…将来は能楽教授上に更に一大進展を図らんとして居ります乃ち現制の儘でもわき手の養成女子囃子科の新設等の如き」「要之邦楽は今日の状態では全く臨時的の施設としてただ単に本校の収入の上に大なる貢献をいたして居りますが学科其のもの、実質に鑑み是非とも洋楽と相ならんで大に之が教授研究をせねばならぬ必要に迫られて居るのであります」と意気込みを語る<sup>62</sup>。

さらに興味深いのは同校の財政事情や予算についても順調であることを具体的に数字で説明していることで、昭和5年度の場合、既定予算では16万4千余円のところ実行予算では21万2千余円の支出となり、本省より特別の援助もあった。収入は予算を超過し、「増収又増収の有様」で分教場に770余名の生徒を入れ、1年間で4万円の収入となり、一般歳入不足の折

から本予算に対して約2割の増収をしているというものである。

分教場は、広く社会に門戸を開き、入学に際しては厳しい条件もなく学びたい人に専門レッスンを授け、またそれだけに数ヶ月で退く生徒も少なくなかったが、音楽学校としては音楽の普及に貢献し音楽の教授を社会に還元しながら、経済的には学校本体の運営において大いに助けられていたことがわかる。明治20年代から続いてきた選科であり分教場であるが、その経済効果について公開の席上で明らかにされ、活字として残っているのはおそらく初めてではなかろうか。

#### (17) 昭和6年4月男生徒の制服を改定

前年に女生徒の制服が改定されたこととあわせて『東京音楽学校一覧』に記されている。女子は洋装が許され、男子は詰め襟から背広となった。東京音楽学校で最初に制服が定められたのは男生徒は明治29年、女生徒は明治43年であった。

男生徒については制服制帽の規程があり、制服は黒色無地セル背広型とし同色のネクタイ、襟に生徒徽章を付ける。夏期は白色のズボン着用を許された。

女生徒は通学服と式服に関する規程である。通学服は綿布麻布又は毛織り地の質素な衣服を用い、御納戸色カシミア又はセル地の袴を着用し紐に生徒徽章を付ける。羽織は銘仙類でもよく、質素な洋服着用で許された。式服は、儀式又は演奏会出演の際は木綿五つ紋、夏は木綿縮鼠色五つ紋付きとし、袴は通学服と同じとされた。

男子の背広は演奏会への対応にも好都合であった。「伝統に囚れ易い官立学校としては誠に英断」<sup>63</sup>。生徒にも好評であった。音楽学校生の日常により即した改定は社会教育路線にも合致しよう。

#### (18) 昭和6年4月本科に作曲部を加える

同年3月19日付で作曲部設置のための申請が行われている。「明治四十二年四月文部省令第十三号東京音楽学校規程中改正ノ必要相認メ候條御改正相成様致度及上申候也 追テ本改正ハ現在ノ職員ヲ以テ実施シ得ベク随テ経費予算ニ関係無之ニ付御了知相成度申添候 東京音楽学校校長乗杉嘉壽 文部大臣田中隆三殿」とあり、ついで従来「声楽部及器楽部」であったのを「声楽部、器楽部及作曲部」とし、改正を要する理由として「現在本校本科ニハ声楽部及器楽部ノミヲ置キ作曲部ヲ設ケサルモ最近本邦音楽界発達ノ趨勢ニ鑑ミ作曲部ヲモ置キテ作曲専攻ノ生徒ヲ養成スベキ必要アルヲ認メタルニ由ル」<sup>64</sup>。作曲部を新設にあたっては新たに担当教員を増員せず、現在の教員で行うため予算には影響がないという断りも記している。

『同声会報』は5月に「作曲部の新設」を載せている。「研究科作曲部に入学する者の修業年限は、声楽部器楽部の卒業生は従前通り三ヶ年、本科作曲部の卒業生に限り二ヶ年を以て終了する事となつた」<sup>65</sup>。乗杉が作曲に言及するのは、欧州視察から帰国早々の昭和6年12月、第2学期終業式の訓辞においてである。「此度の旅行によつて、本校の制度に随分改良を加へねばならぬ事がある様につくづく感じた。先づ作曲を誰にでも強要せねばならぬ。音楽はたゞ

歌つたり弾いたりばかりして居てはいけない。即ちその音楽の想の解釈をするには皆がある程度の作曲の力を必要とするからである」<sup>66</sup>。作曲だけではない。ヨーロッパの音楽学校長と交流し、東京音楽学校とは様子を異にするレッスン風景や設備を目の当たりにし、図書館の充実に感嘆し、学生のオーケストラのすばらしさに羨望を抱いた校長は、音楽学校への理解を深めたと同時に東京音楽学校の課題の多さを痛感して帰国したことであろう。

昭和7年4月、初めて作曲部志望の生徒が予科に入学し、翌8年4月に本科作曲部に進む。

#### (19) 昭和6年4月予科に管楽器専攻志望生の入学を許可

東京音楽学校は明治31年から定期演奏会を行い、35年からオーケストラの全曲演奏も行っていたが、依然として管楽器、特に金管楽器は海軍軍楽隊に頼る状態が続いていた。そうした現状打破の第一歩である。とはいえ、まだオーケストラに必要な管楽器それぞれの専門教師や奏者が揃うわけではない。東京音楽学校のオーケストラ・メンバーには、副科として習得した管楽器奏者が多く含まれ、教師側もピアノやヴァイオリンでヨーロッパに留学した際に管楽器を習得して帰国し、今度は生徒に教えるといった取り組みから始まった。楽器ごとの専門教師が揃うのは音楽学部発足以降である。

#### (20) 昭和6年4月外国人教師を5人に増員（うち傭教師4人）

具体的な人数の動きは前出「2-1 昭和2年度～21年度の教員数および生徒数の推移」の表に示されている。この件は「同校発展の第一着手として来る四月一日より内外教授の増聘もする」<sup>67</sup>などの記事にも見られる。

乗杉が邦楽分野の充実に熱心であったことは知られるが、そのために洋楽を削減しようとしていたわけではない。同校における洋楽分野の育成は国家的にも重要な使命であり、外国人教師から学ぶ必要は少しも減っていなかった。「外国人教師は他の諸学校は勿論帝大にさへその専任はないのに本校に於ては定員三名の処へ四名の専任教師を有するといふ事は誠に多幸とせねばならぬ事で、余の苦心も亦こゝに在つたのである。洋楽の渡来後僅か五十年、吾々はまだまだ洋楽を学ばねばならぬ。いくら学んでもこれで十分だといふ処へゆくにはまだか成りの歳月を要するであらう。吾々がかくの如く外人につき又専ら洋楽に孜々として精進するのはやがて来るべき我民族音楽の大成への道程でなければならぬのである」<sup>68</sup>。

#### ＝昭和6年付記＝

1. 昭和6年1月10日文部省令を以て、中学校において「唱歌」は「音楽」と改められ、必修科目となり、第4学年以上においても増課科目として音楽を課すことも可能になった。当時、東京音楽学校師範科卒業生は就職率100パーセントであったが、新聞では音楽科教員過剰との報道もあり、その後の就職問題にも朗報であった。

2. 卒業生に向けて発信される乗杉校長の社会教育思想の例。「前途有為ナ青年子女ヲ国家社会ニ送り出ス」という式辞は一般的であろうが、「学校トハ申セ本邦唯一ノ官立音楽学校トシテハ社会的ニ特権ノ使命ヲ背ハサレテキルノデアル」「国家ハ、而シテ社会ハ、若キカアル諸



君ニ対シテコノ点ヲ大ニ期待シテ居ル」、従来音楽家は世間には没交渉で象牙の塔にこもりがちであったが「音楽ハ社会性ヲ有スルモノ」であるという自覚をもって社会に出てほしいと、社会や世間との接点を大事にし、音楽は閑暇人や遊び人がする仕事であるという世間の謬見を矯正し、国家に貢献するよう激励している。

3. 校長の心配事の一つに思想問題が加わるようになった。東京音楽学校が校長名で思想問題に関して書面で生徒父兄に配布し、表立って神経質になるのは少し先になるが、この年の第1学期始業式でも言及されている。「然るにこの三月末の諸子の行動はどうであつたか？生徒として俯仰天地に恥ぢざるの態度であつたか？」と思想問題の喧しい中で、同校のみは模範的であると公言していたところ「不謹慎なる行為」があったことを話し、「スポイルされた過去の事実はすみやかに葬れ。而して新しき朗らかな前途に対し、再び悔ゆること無き様心掛けよ」と戒めた。同じ始業式では、やはり3月にピアノのハンマーを4つ故意に破壊した「不埒千番な生徒」があったこと。これに対して校長は「無抵抗にして罪無き楽器」「魂であり武士の刀にも等しきもの」「諸子を育てあげて呉れる命から二番目の物」「国家の器」に対して「芸術の冒瀆者たる破廉恥漢を本校生徒中より出した」として「無念至極」と語った<sup>69</sup>。50周年を迎えて制服も一新し、教育内容上も充実して隆盛が伝えられる同校にも新たな問題は絶えず起こっていた。

4. 8月下旬から12月にかけての欧州視察を控え、校長は7月25日に行われた同声会の総集会で視察の目的5項目をあげた。すなわち1) 我が国の教育で音楽の歩みが遅い原因を究明する。2) 外人教師定員3名を将来7名にまで増加する方策を探る。3) 在外研究員の結果があまり芳しくないので実地踏査をする。4) ドイツ、オーストリアを中心に各国に於ける音楽科の取り扱い。5) 日本の楽団を国際的なものとするため音楽国際連盟支部設置についてアレンジして来たい、というものである。

8月26日午前9時、乗杉校長は東京駅で300余名の万歳の歓声に見送られ、国府津及び神戸まで随行する校長代理や教授とともに特急燕号にて神戸に向かった。途中、横浜、国府津、名古屋、京都、大阪等の沿道駅で卒業生・在学生など多くの出迎えを受けながら、午後5時56分に三ノ宮駅に着いた<sup>70</sup>。

## 注

- 1 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』、東京：音楽之友社、平成15（2003）年。
- 2 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 演奏会篇第二巻』東京：音楽之友社、平成5（1993）年。
- 3 小川利夫・新海英行編『近代日本社会教育論の探求』東京：大空社、平成4（1992）年。

- 4 新海英行・伊藤めぐみ・浅野俊和・山崎由可里・中山弘文・中嶋佐恵子共著『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第43巻第2号、平成9（1997）年、289-330頁。
- 5 『社会教育思想研究』福岡市：九州大学大学院人間環境学府発達社会システム専攻教育学コース社会教育思想研究室、第1号、平成13（2001）年、1-40頁。
- 6 松田武雄『近代日本社会教育の成立』福岡市：九州大学出版会、平成16年（2004）。
- 7 乗杉嘉壽「国民の試練」（小川利夫監修『社会教育基本文献資料集成第8巻 IV社会教育行政論の形成④』東京：大空社、平成3〔1991〕年。初版は『社会教育の研究』東京：同文館、大正12〔1923〕年。426頁）
- 8 乗杉嘉壽「国民の試練」同上431頁。
- 9 乗杉嘉壽「時局の与ふる試練」『社会教育の研究』276-277頁。
- 10 「英米の戦時教育」『教育時論』第1210号、大正7（1918）年11月、30頁。
- 11 『社会教育』第1巻4号、大正13（1924）年6月20日、4頁。
- 12 同上。
- 13 松田武雄『近代日本社会教育の成立』50頁。
- 14 乗杉嘉壽『社会教育の研究』156頁。
- 15 乗杉嘉壽『社会教育の研究』158頁。
- 16 同上 2頁。
- 17 同上 1頁。
- 18 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第2巻』1532頁。『西日本新聞』平成5（1993）年10月10日～17日より転載。
- 19 大石清『大石清の助手席人生 テューバかかえて』東京：音楽之友社、平成11（1999）年、84頁。
- 20 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』354頁。
- 21 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』64頁。
- 22 『同声会会報』第136号、昭和3（1928）年5月、11頁。
- 23 『同声会会報』第137号、昭和3（1928）年6月、1-5頁。
- 24 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二巻』1496-1497頁所収。
- 25 『同声会会報』第140号、昭和3（1928）年9月、2頁。
- 26 同上3-4頁。
- 27 同上6頁。
- 28 『同声会会報』第165号、昭和5（1930）年10月、2頁。
- 29 昭和3年当時の東京音楽学校の学科編成：本科と師範科に大別され、本科は修業年限3～5年で声楽部と器楽部に分かれ、師範科は修業年限3年の甲種師範科があった（制度上は1年の乙種師範科もあったが、乙種は昭和2年2月に中止されそのまま廃止となったため、実際には甲種のみであった）。本科希望者はまず修業年限1年の予科に入学した。

また研究科、選科、聴講科があり、研究科には声楽部、器楽部、作曲部があり、声楽部と器楽部は修業年限が2年以内、作曲が3年以内であった。

このほか、官庁学校等の委嘱に応じて委託生を受け入れていた。また大正元年に設けられた能楽囃子生徒養成規程があり、資格は12歳以上。笛、小鼓、大鼓、太鼓あわせて定員は10人であった。

- 30 『同声会会報』第127号、昭和2（1927）年8月、4頁。（『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二卷』1126頁に転載）
- 31 乗杉嘉壽「椅子を離るゝに臨んで」（『社会教育』1-5号、大正13（1924）年8月、9頁。
- 32 『音楽世界』第1巻第2号 昭和4（1929）年2月 84頁。
- 33 同上。
- 34 『三曲』昭和5年4月号には宮城の「東京音楽学校の箏曲科を担当するに当つて」と題する文章が掲載され、教授法などの計画が述べられている（17-18頁）。
- 35 『同声会会報』第142号、昭和3（1928）年11月、5頁。
- 36 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二卷』1499頁。
- 37 『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇第二卷』1504頁。
- 38 『同声会会報』第144号、昭和3（1928）年1月、6頁。
- 39 『同声会会報』第141号、昭和3年10月、5頁。
- 40 同上 9頁。
- 41 『音楽世界』第1巻第8号、昭和4（1929）年8月、73頁。
- 42 同上 102頁。
- 43 同上。
- 44 『同声会会報』第150号、昭和4（1929）年7月、2-4頁。
- 45 『同声会会報』第156号、昭和4年12月、4頁。
- 46 同上 6頁。
- 47 同上。
- 48 『時事新報』昭和4（1929）年11月29日。
- 49 『同声会会報』第147号、昭和4年4月、7頁。
- 50 『昭和四年十一月創立五十週年記念事業書類』東京芸術大学蔵。
- 51 『同声会会報』第164号、昭和5（1930）年9月、26頁。
- 52 『同声会会報』第165号、昭和5年10月、2頁。
- 53 『同声会会報』第166号、昭和5年11月、3頁。
- 54 同上。
- 55 『同声会会報』第158号、昭和5年2月、9頁。
- 56 同上。
- 57 同上 22頁。

- 58 『同声会会報』第160号、昭和5年4月、17-18頁。
- 59 『同声会報』第161号、昭和5年5月、17頁。
- 60 『同声会報』第167号、昭和5年12月、2頁。
- 61 『同声会報』第172号、昭和6（1931）年5月、11頁。
- 62 『同声会報』第173号、昭和6年6月、1-2頁。
- 63 『同声会報』第171号、昭和6年4月、22頁。
- 64 『自大正十四年三月至昭和二十三年七月 東京音楽学校規則 第二冊』（国立公文書館蔵）
- 65 『同声会報』第172号、昭和6年5月、5頁。
- 66 『同声会報』第179号、昭和7（1932）年1月、25頁。
- 67 『音楽世界』第1巻第2号、昭和4年2月、84頁。
- 68 『同声会報』第165号、昭和5年10月、3頁。
- 69 『同声会報』第172号、昭和6年5月、2-4頁。
- 70 『同声会報』第176号、昭和6年10月、1頁参照。

**Tokyo Academy of Music under the leadership of NORISUGI Kaju, 1928–1945:  
Realization of its founding spirit and social education in practice**

HASHIMOTO Kumiko

This article represents an attempt to reevaluate Tokyo Academy of Music (Tōkyō Ongaku Gakkō) and its activities during the time when NORISUGI Kaju (1878–1947) was its principal, in terms of how effectively it realized the spirit of its founding, and of how Norisugi put his ideas for social education into practice.

Although it was the only national music school at the time, Tokyo Academy of Music experienced various challenges to its continued existence and development during the years when it was led by NORISUGI Kaju, namely from 1928 to 1945, the year of Japan's defeat in World War II. During this time, it embarked on a number of social education programs that formed the basis for the development of the music culture that Japan enjoys today. At the same time, however, due to its unique position and role in society, it was also caught up in activities associated with the war effort.

With the exception of studies of individual musicians and concerts, Tokyo Academy of Music of this time has gained little attention in previous research. This may be because of negative ideas about the contributions it made to the war effort through composition and performances. Another reason may lie in the emphasis placed so far on the role played by Norisugi in pushing the school down the path of militarism, as a bureaucrat earlier affiliated with the Ministry of Education who often negotiated successfully with the military authorities.

In the period before and during the war, musicians of the Tokyo Academy of Music often appeared in concerts for the Emperor and his retinue, in an effort to overcome its somewhat weak social standing and establish its reputation with the country and its public. With the same aims, the school also publicized the achievements of its first principal, ISAWA Shūji (1851–1917, principal in 1888–1891). As well as undertaking regular concert series outside of the school and traveling to different venues to give concerts on request, the school also arranged performances for radio broadcast, and established a major in composition. After Norisugi returned from a tour of inspection to Europe in 1931, he was instrumental in establishing the Ueno Children's Music School, the Japanese pioneer in early childhood music education. Within in Tokyo Academy of Music itself, a course in Japanese traditional music was established, and the increase in numbers of both staff and students at this time reflects its



growing role in social education. The peaks of its activities in these terms are its celebratory activities of 1940 (the 2600th anniversary of the country's founding) and its performance tour to Manchuria in 1942 in celebration of the 10th anniversary of the founding of the new state. In the four years before Japan's defeat in World War II, the school elevated the Japanese music course to a major, and added an extra year to the teacher training course, transforming it from a three-year course to a four-year one.

Earlier, as a bureaucrat in the Ministry of Education, Norisugi had worked in the administration of social education, establishing a department for that purpose within the Ministry and developing a unique theory of social education. His educational theories are currently being reappraised as the archetype for Japanese social education of the modern era. Throughout the pre-war and war years when he led the Tokyo Academy of Music, he consistently worked towards two goals: 1) realization of the spirit under which the school had been founded in the Meiji Era, ideals which he often returned to in his activities and writing; and 2) putting into practice his ideas for social education as summed up in his slogans "actualization of school education" and "school as society and society as school." Moreover, these goals worked effectively in the social context of the times, acting in coordination as Norisugi's guiding principles for management of the school's affairs.

Before making hasty criticisms of the educational policies of this time, we should be careful to gain an adequate understanding of how they worked. The ideas for social education proposed and realized by Norisugi still possess much of relevance for Japanese music education and its music schools today.